

永久平和

石原莞爾自筆

第141号
(平成29年7月25日)

目次

巻頭言 未来に向けて	1
仲條拓躬	
◆繆斌工作再考	2
野村乙二朗	
●原発をめぐる二つの汚染	4
岡田恒良	
●石原莞爾語録	5
総会報告	
●SNS 会員便り	6
●コラム	8

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

未来に向けて

当会会長 仲條拓躬



苦しみや悲しみ、そして辛さこそが、生きている証ではないでしょうか。私は生きる力とは、成功を続ける力ではなく、失敗や困難を乗り越える力だと考えます。一度も失敗をしない人間などこの世にはいないことでしょう。様々な分野で成功してきた人達は、才能や努力だけでなく、失敗を乗り越える力があるのだと思います。

この度、私は2回の手術を行い一度は心肺停止にまで陥り、現在も強い薬の副作用と闘っております。石原莞爾平和思想研究会(以後、石研)の会員の皆様にはご迷惑をおかけしております。困難からさらに大きな力を身につけたいと考えています。どんな技術や力よりも、逆境に強い心を持った人間になりたいと思っています。

これまでの私は、どうしようもないどん底に落ちたこともありましたが、家族や同志などのお陰でなんとか立て直してきました。私には常にアクシデントが付きまといています。それは自分に原因があるのでしようが、肉体的にも精神的にも、そのアクシデントを乗り越えてきました。

まだまだこれからもっと高いハードル、苦しい出来事があることでしょう。どんなアクシデントも飛び越えてみせると、自分自身に誓っています。そのためには、いま自分がすべきことは何なのかを正確に受け入れ、努力していくしかないと思います。どんな状態であるにせよ、何とか乗り越えたいと願っております。

悩みや苦しみなどは切っても切りはなせません。人間関係に悩み、病気に悩みといくらでも、悩みや苦しみは生まれてきます。私は

助け合いの輪の主催者として、また石研の一員として多くの人に勇気や希望を与えたいと願っています。

悩み苦しんでいる人が、助け合いの輪の中にとけ込んで勇気を持ってくれば、これほど嬉しいことはありません。自分にとっては、同志や友達こそが大切なものです。その考えは幼少の頃から変わりはありません。

自分が辛くて苦しんでいる時期、家族や同志からの愛情や励ましのメールが、どれほど私をどん底から救い上げ励みになったか分かります。その時、言葉には大きな力があることを、痛感しました。

現在、石研の会員には高齢で90歳、100歳の方も多く毎月、計報が届きます。実際の歴史を語る方が少なくなっています。また、会員の多くはインターネットを使えない方ばかりで会報誌の作成発行が必要となっています。だが、財政状況が逼迫しております。このままでは年度内に会報の発行を終了し、SNSのみに集約せざるを得ない状況になっております。

現在、世界ではテロリストを生み出してしまっている事象が絶えず、世界のどこかで無辜の民が苦しむ状況が続いております。この解決の一つとして恒久平和の意味を理解し、生活スタイルや行き過ぎた利潤追求型の価値観の是正にあります。

石原莞爾將軍が言う農業観・教育観を信じて生きたいと思うのです。一人の力には限界があります。自分だけでは、微力なのですが、様々な人に支えて頂き、素晴らしい同志とライフスタイルの創出を目指し、一層の勉学に励み、助け合いの輪を大切に所存です。一層のご愛顧を賜りますよう謹んでお願い申しあげ、皆様のご健康とご健勝を祈念いたします。

コ◆ラ◆ム

石原莞爾の人柄について触れたいと思います。石原莞爾に初めて接した人は、この男はだいいぶ変わっているぞと感じたそうです。馬鹿にされたように感じ、好感を持たないとか…。しかし二度三度と接するうちに、その偉大な人柄に心をうたれ、敬慕の念が自然に深まってくるようになったといえます。

石原莞爾のすばらしい頭脳は、天才的で、学識は拔群、その上研究心が旺盛であったから、軍事学は勿論のこと、歴史、政治、外交、哲学などにも精通していたるその天才を活かすため、石原莞爾は学者として、政治家として、哲学者として進むべきであったと言う人達もいます。

ですが、やはり軍人タイプで、その性格、気骨、器量などは、石原莞爾の進んだ軍職が最も適していたと思います。石原莞爾は不世出の理想的軍人だったと思いますが、私が最も尊敬する点は、事を進めるにあたり、まず正義を第一とし、大局的な視野の下に先の先までを洞察して判断を下し、自分一個の功名を考えず、ただ国民のために最善を尽したい、という一念しかなかったということです。

例えば権力を笠に威張ったり、官僚的な役人に対しては、所かまわず手厳しい批判を加え、軍部内の派閥の対立、例えば皇道派と統制派の対立や、東條軍閥の横暴に対しては、階級の下上を問わず、職を賭して反攻したことは歴史書の通りです。石原莞爾が東条英機より先に生れていたら、日本の歴史は大いに変わっていたとよく聞きます。

この半面、立場の弱い後輩、とくに兵や一般民

衆、又は婦女子などに対しては、極めて同情的で思いやりが深く親切だったといえます。人格は非の打ちどころなく、清廉潔白、その生活信条は一生を通じて簡素の二字に徹し、酒も煙草も口にしなかったということです。

仲條 (江)

「とうとう」と言うか、「遂に」と言うか、将棋の世界でも生身の人間はAI（人口知能）には勝てなくなってしまうた。

将棋は紀元前3世紀頃のインドが発祥とされ、西に伝わりチェスに、東の中国に伝わり「将棋」となり、それが仏教の伝来と共に日本に伝わり、やがて「取った」相手の駒を使えるという日本独自のルールの採用で局面が一挙に複雑化したと言われている。

その将棋の世界で、若干十四歳の少年が前人未到の公式戦二十九連勝を達成した。彼は詰将棋や将棋ソフトで学んで強くなったらしい。

詰将棋は通常の対局では到底指さない手を使わなければ詰まない。また、将棋ソフトのAI側は定石を逸脱（＝無視）した手を「平気」で指してくる。

言うまでもなく将棋は人間の考案したゲームである。しかし、将棋への人知の及ぶ範囲は限定的なものであり、それが今まで「定石」とされていたに過ぎないことをAIに教えられた。

人間の発明品の一つであるAIは、ある条件下の中で最も合理的な判断を行い、生身の人間のように情に流されたり、判断ミスを犯すことはない。そのため、今後ますます複雑化、巨大化する社会システムを維持管理するには必要不可欠な機器で

ある。しかしPCを使っている人たちには何度も経験済みだろうが、PCはとんでもない誤作動を「平気で」起こす。それはAIとて同じではないのだろうか？

いささか唐突だが、「生命の星・地球」の生態系を守る最善の方策として、その元凶たる人類の抹殺をAIが判断・実行するという近未来も考えられなくもない。少なくともSF映画の題材位にはなるだろう。

会費納入者が百名を大きく下回り、会報の発行が維持できなくなりました。

そのため「永久平和」は来年1月25日発行の143号で終刊の予定です。また、それに伴い、今年の7月末をもって事務長の辞任と事務所の返上をいたします。

永らくお世話になり、ありがとうございました。

(山崎)

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円（送料別）

会費（年間） 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第141号 平成29年（2017年）7月25日発行

<http://www.ishiwara-kanji.com/>

E-mail : heiwa_ishiwara_kanji@yahoo.co.jp